

八聲甘州 寄參寥子 詞

八聲甘州 參寥子に寄す

有情風萬里捲潮來
無情送潮歸
問錢塘江上
西興浦口
幾度斜暉
不用思量今古
俯仰昔人非
誰似東坡老
白首忘機
記取西湖西畔
正春山好處
空翠煙霏
算詩人相得
如我與君稀
約他年東還海道
願謝公雅志莫相違
西州路
不應回首
爲我沾衣

有情の風は 万里 潮を捲いて来り
無情なるは 潮を送って帰る
問うらく 錢塘の江上
西興の浦口
幾度の斜暉ぞ
用いず 今古を思量することを
俯仰すれば 昔人は非なり
誰か似ん 東坡の老の
白首 機を忘るるに
記取す 西湖の西畔
正に春山の好き処
空翠 煙霏たるを
算えみるに 詩人の相得たること
我と君との如きは稀なり
約す 他年 東のかた海道を還らんと
願わくは 謝公の雅志に相違うこと莫れ
西州の路に
応に 回首して
我が為に 衣を沾すべからず

情ある風ならば、万里のかなたより、うしおをまきあげ来てくれるのだから、心なしにも、うしおを吹きかえす。私はひとり問うてみる、「あの錢塘の川の、西興のわたしのあたりで、夕日の光をあびたのは、いったい幾度だったか」と。だが、今と昔をつくづく思うのは、よしにしよう。頭のあげさげほどのつかのまに、かつての人は、もういなくなったのだ。この私、東坡の老人みたいに、白鬚で、功利の心を忘れ去ったものはあるまい。

私はよくおぼえている、西湖の西の岸べでは、今こそ春の山々のほんとうにみごとなき、いちめんの緑はふかく、かすみ立ちこめているのを。ところで、数えて見ても、詩人のなかまと許し合った者と私のようなのは、まず、さらにはあるまいね。約束しておこう、いつかはきっと、東の海へ私はまた来る。あの謝安のころざしはとげるつもりだ。君も決して違約したもうな。西州の門の路で（といえは私の死後になるのだが）、首をねじむけ、私のためにころもをぬらす。そんなことをしてもらいたくはないのだ

○：參寥師 僧道潛。參寥子と号した。於潛の人。内典外典に通じ詩に巧み、蘇軾との交遊は元豊元年（一〇七八 蘇軾四三歳）に始る。軾の湖州の任には秦觀とともに同行、黄州に在る蘇軾を夢み、軾が杭州の知事となると杭州の知果寺に住み、また惠州へはわざわざ使いを送っていたわつた。參寥子集がある。

○元祐六年（一〇九二）の作。蘇軾が杭州から、都へよびもどされ、翰林学士承旨（詔勅起草の官）に任ぜられて出発する直前の作。宋代には、かれのこの詞の筆跡を石に刻したものがあり、その署名の日付は「元祐六年三月三日」とあったという（『苕溪漁隱叢話』後集 卷三十九）。王文誥が紹聖三年（一〇九六）儋州に在った時の作とする説（綵案 卷四十一）は従い難い。○八声甘州 詞牌の名。双調。前半九句四韻、後半一〇句四韻。同じ平声の韻をふむ。○參寥子 僧道潛の号（上巻 一二五ページ）。このとき、杭州の智果寺にいた。のち、蘇軾が儋州に流されたとき、はるばるかれをたずねようとしたが、その詩に朝廷を誹謗する語があるとかどで、罰せられ還俗せしめられた。弁護する人があって、一一〇一年また僧の身にもどり、一一〇六年ごろ寂した。宋代の詩僧として名がある。蘇軾は杭州出死の直前にかれを訪問し、いとまごいしたが、この詞は恐らくそれより前の作であろう。

○有情風 好意ある風。作者愛用の擬人法（上巻 解説 一一ページ以下）。○捲潮来 錢塘江の川口の満潮をさす。必ず定まった時刻におこるので、「潮信」といわれた。○無情 やはり風についていう。この二句は風によそえて、暗に作者に好意をいだく人々とそうでない人々とをさすであろう。そして無情の風に吹きかえされる潮のように、作者は意志に反して都へもどらねばならぬことをも含めて言うであろう。○問錢塘江上 問はこの句を含め、幾度斜暉までの三句にかかる。いわゆる「一字領三句」の句法。○西興浦口 西興は杭州の東南、錢塘江をへだてた対岸に在り、今蕭山県に属する。渡船場。浦は船つき場のある水辺をいうことが多い。○斜暉 沈みゆく日の光。○思量今古 西興は古くからの名所で、詩にもよみこまれた。この渡しを通った古人をおもうのである。○俯仰 俯仰は上をむき下をむくことから、短い時間をいう。晉の王羲之の「蘭亭の序」に「向の欣びし所は、俛仰の間に、已に陳き迹と為れり」とある、俛仰は即ち俯仰である。○昔人非 昔は一般に過去。ごく近い過去をもう。非は是の反対。昔の人（友人であった人をも含めて）が今はない。○東坡老 蘇軾の自称。○白首忘機 白首は白頭と同じ。機は機心。「莊子」に見えることばで、利害得失を計算する心。○記取 しっかり心にとめる。○西湖 これは杭州の西湖。○正春山好処 正は今やまさに。この正は次の空翠までかかる。一字領二句。○空翠 いちめんの緑の色。空は外のものは何もなく、それ（緑）だけがある意と思われる。○煙霏 煙は煙霞、山の気。霏は雪のふるさまが原義であるが、六朝以来、雲や霞のたちこめているようすを言う語として詩に用いる。○相得 なかがよい、心からのつきあいをすること。○約他年一句 上三四の句法。○東遠海道 東晉の謝安（三二〇—三八五）の故事。謝安は宰相となつたのちも、かつて隠棲していた会稽（浙江省紹興市）の東山の風景を忘れることができず、「北方の侵入軍の防禦態勢がととのい、平和になったら、そこへ帰りたいものだ」との意向をもらしていた（『晉書』謝安伝）。海道というのは、会稽が海に近いからである。ここはその故事を利用して、いつか又この杭州の近辺にもどって遊びたいものだとの意を述べる。○謝公雅志 謝公は謝安。雅志はつねづねいっていた意図。上述のことをいう。○真相述 真は禁止の辭。參寥子に、自分（作者）との約束をたがえるな、というのである。○西州路 西州は東晉の都建康（今の南京）の城門の名。謝安は病気が重態になったとき、都へよばれ、職を免ぜられるかと思っていたのに、「西州門からかごで入れ」との命をうけ、やはり自由な身になれぬかと歎息し、やがて死んだ。謝安に愛せられていた当時の有名な文化人羊曇は、謝安の死後、西州門前の路を通るたびに泣いた（『晉書』謝安伝）。西州門は今の南京市内、朝天宮の附近だとい、また苧橋のへんだともいう（陳文述「秣陵集」卷二）。○不応回首 回首はふりむくこと、過去への回顧をいう場合が多い。不応は、次の句までかかる。そうなつてはいけない。